

【随 筆】

もう夏ですかね

住 吉 尚
(釧路支部)

季節は少し前、4月中旬のことです。ある日散歩に出
ていた妻が、家のそばで「足輪が付いた野鳥が死んでい
た!」と言って持ってきました。鳥はアオジです。野鳥
の足輪に関して日本では、山階鳥類研究所と言う所で一
元管理されています。釧路ではタンチョウ保護研究グ
ループがここの関係が深いので、タンチョウ保護研究
グループにこの死体を持ち込み、「山階に送ってほし
い!」と頼みました。それがつい先日になって「あのア
オジは2年前の秋に中標津町内で足輪を付け放されたも
のだ」との回答を得ました。放した時はその年の幼鳥だ
ったと言うことですから、たぶん昨年も道東に飛来して繁
殖をした個体なんでしょう。今年も!という矢先に窓に
ぶつかり命を落としたのでしょうか。残念ですがこうし
て足輪が付いた個体を回収するのは大変まれなことです。
特にアオジと言う鳥は、道内では最も多くの個体に毎年
足輪が付けられていると言います。でもほとんど回収さ
れていないので、足輪による調査には向かない鳥とされ
ています。世界中でたくさんの人たちが野鳥を捕まえて
足輪を付けています。最も回収率が高い鳥はカモ類です。
これはカモ類が世界中で狩猟の対象になっていて、たく
さん獲られているからです。秋に越冬地でカモ類をたく
さん掴み、足輪を付けて放しています。これらのカモ類
は春になると繁殖地であるシベリアなどに飛来します。
ここにはアメリカ帰りもいれば、東アジアで越冬した家
族もいれば、遠くヨーロッパ南部で越冬した家族もい
ます。その子供たちは繁殖地で新たなペアの相手を見つ
けて繁殖し、秋には越冬地に帰るのですが、ヨーロッパ
で越冬したカモがアメリカ帰りと結婚して、冬はアメリ
カへと渡るケースなどがあり、足輪を付けた場所と足輪
が回収された場所がまるで地球の反対側になるケースも
あると言います。ただこれは鳥の中ではまれなケースで、
普通は毎年同じ越冬地と繁殖地を往復しているようです。
アオジの足輪が回収されるのは何千羽に1羽と言う回収
率の低いものですが、それでも少しずつアオジの生態の
解明に役に立っていくのでしょうか。

先日テレビでヤンバルクイナの保護活動についての放



拾ったアオジ

送がありました。人工ふ化し人工的にヒナを育てた個体
を自然界に放鳥し、その個体を追跡していた中で、1羽
の雄のクイナが野生のクイナとペアになり、ヒナを育
てている!とか。これも足輪を付け、個体識別ができて
初めて、人工繁殖も野生個体数増加のために大きな役割
を担えるのだ!との証明になったものです。シマフクロ
ウも歯がゆいばかりの時間がかかっていますが、徐々に
個体数が回復し始めています。大型の鳥は保護活動が進
んでいますが、小鳥たちにはなかなか目がいき届きませ
ん。シマアオジは理由が判らないまま道東からはほぼい
なくなりました。

新型コロナウイルス感染症は沈静化してはいますが、
外出の自粛が奨励されています。でも高齢者は家でじっ
としていてボケが進むとか、不活発になることで
体力が衰えるとか、マイナス面も大きいと言います。こ
こは釧路、札幌や東京とは違います。公園に散歩に出た
からと言って、人が沢山なんてことはありません。でき
るだけ体を動かし、頭も使って前向きに乗り切りましょ
う。

さて今日は魚釣りにでも!と出かけました。車を走ら
せながら、弁当は積んだ、仕掛けはタックルボックスに
入れた、保冷材はクーラーボックスに入れたと、朝やっ
たことを思い出していると、冷蔵庫から出したイソメを
車に積んだ記憶がありません。アララ忘れたかな?と思
いながら走っていると電話が!。路側帯が広がったと
ころに車を止めると妻からです。「父さん、イソメ忘れ
ていったよ!」「やっぱりか!」仕方がありません。そ
れではまずタンチョウの観察をしながら少し遠くまで走
ることに。姉別、厚床まで走りましたがタンチョウはど
こにも見当たりません。そうこうしているうちに目的地
に到着。さて餌がないのでカレイ釣りはあきらめ、チカ

釣り用のサビキを出して、チカはいるかな？何のあたりもありますが。竿を振り振り車へと戻って行くと、なんとググッと引いてチカが1匹。これが災いしました。その後小一時間も竿を振りましたが音沙汰なしでした。仕方なく戻りながらイソメを買いました。もう11時半を回っていたので、もう少し走って誰もいない広い駐車場に車を止め、太平洋を見ながら自分で作った弁当を食べました。コロナ騒ぎで人との接触を避けるように言われていますから弁当持参での釣行です。食事後釣り場へ移動して数匹のカレイを釣って帰りました。この間に「オーイ」と呼んで聞こえるような場所に人はいませんでした。道東は人口希薄ですね。

手前みそではありますが、釣りはあれこれ頭を使い、体も使うのでボケ防止には良い趣味だと思いますよ。釣り餌を忘れたぐらいなら、帰ってからワハハと笑って終わりですからね。移動しようとしていると岸壁にシギの仲間が！双眼鏡で見るとキョウジョシギでした。薄茶色の目立たない色をしているシギチドリの仲間では、キョウジョシギは白・黒・栗色と、色どりも華やかな種類で



キョウジョシギ



オオジョシギ

す。華やかな装いを着飾った京女に例えた名前です。この仲間にはダイゼンと言う鳥もいますが、これは大膳所（天皇の食事を作るところ）からきていると言いますから、その昔は天皇の食卓には良くシギチドリが出たのかもしれませんがね。そしてこの仲間の多くは旅鳥と言って、春と秋に渡りの途中で日本に立ち寄るもので、もう少し休んだら極北のツンドラ地帯まで行き繁殖します。

釣りの帰りです。道路に太ったシギが。オオジシギです。こちらはオーストラリアから到着したばかりでしょう。ゴールデンウィークを過ぎると、大空を独り占めでもするように大きな声で「ジジジジジ。ジーイ。ジーイ。ガ・ガ・ガ」と鳴いて飛び回るオオジシギが私は大好きです。シギとしては太っちゃですが、あの体でオーストラリアから一飛びで日本まで飛んでくるのだとか。1週間近くかかるのでしょうか、一休みもせずに太平洋を飛び越えてくるなんてすごいエネルギーですね。大声で鳴きながら大空を飛び回るのは、シギの雄が縄張りを宣言している行動です。「ジジジジジ。ジーイ。ジーイ」は鳴き声で、「ガ・ガ・ガ」は尾羽を広げて急降下するときに出る音だと言うことです。それにしても豪快の一言。このオオジシギは日本には普通にいる夏鳥ですが、世界中で日本だけで繁殖する鳥で、日本では本州の高原地帯や東北・北海道の草原や湿原で繁殖し、冬はオーストラリアで越冬します。でもこのオオジシギがここ道東ではずいぶん数が減ってきています。自然な草地が減ってきたことによりですが、ここ道東では牧草地でもたくさん繁殖していました。ただ最近は牧草の刈り取り時期が以前と違い大変早くなっています。このため未だ抱卵中の巣を刈り取られるので牧草地での繁殖は極端に減りました。酪農は草を作り、それを牛に食べさせ、乳を搾ってやっと収入です。以前は草の収穫量を重視していましたが、最近では栄養収量が重視されてきたことにより、早刈りが奨励され始めたのです。これは日本の酪農業が世界と比較したとき、かなりコストが高いと言うことから、できるだけ輸入飼料に頼らずにやって行くことでコストの削減ができるのでは！という考えです。こうすると6月中の割合天候の良い時期に良い草を収穫できるということになりました。でもこの時期は未だオオジシギが抱卵中なのです。このように人間は時代に合わせた農業をしていきます。野生動物はそんな人間の行動の変化にも大きく影響を受けるのです。また最近では酪農業でも後継者不足などで家族経営から大規模な農業法人になるところも多いようです。大規模な農業法人では感染症対策と言うこともあり、農場周辺が大変綺麗に

片付いているところが多いようです。このため冬期に農家周りに頼っていたタンチョウが、きれいに片付いた農場では餌を確保できずに、別の餌場を求めて移動していくような気がしています。タンチョウの分散のために、冬期間に給餌場での給餌量を減らしているだけでなく、農家周辺の環境の変化もあって、タンチョウが道東から道央方面へと進出していく動機になっていると私は思っています。ともあれ、野生動物と人間の経済活動は相反する影響を受けやすく、自然保護と言っても難しい場面が多いものですね。

5月23日土曜日、天候は曇り、どんよりはしていますが雨は降りそうではありません。一日中家でゴロゴロしていてもつまらないので、タンチョウの観察に出かけました。まずは厚岸町太田方面へ。ここから標茶町に向かって北上します。なかなかタンチョウの姿が見えません。やっとでした。こんなところに！と思う所でタンチョウのつがいを見つけました。農家の堆肥山です。双眼鏡で見ると足元にヒナが1羽見えました。早速カメラを出して写真をパチリ。拡大して見ると、なんと親鳥の足元にヒナはいません。もう1度双眼鏡で見るとヒナは堆肥の陰に移動したようで見当たりません。がっかりです。でも今年初のヒナの確認です。ウキウキしながらドンドン進みます。もう1カ所やはり農家の庭先でタンチョウのつがいを見つけました。深い溝の中にいましたが、「変な奴が見ている！」と出てきました。でも足元にヒナは見えませんでした。いつまでも道路に止まっているわけにもいきませんので、「ヒナはいないなー！」で発車です。さらにしばらく走り、林を抜け釧路川の右岸堤に上がると100mほど先にタンチョウが1羽。何をしているのかな？と思っていると、私の頭を越えて1羽のタンチョウが築堤上にいるタンチョウの横に飛来しました。2羽で築堤を越えるようです。そしてその足元には1羽のヒナがちょこちょこ付いて行くのが見えました。オー！ヒナだ！これで今年初のヒナの写真も撮れました。

さてさらに進みます。弟子屈町に入ると若いタンチョウが何羽もいるのが見えました。良く観察するとすぐ近くにいる1羽に足輪が付いているのが見えたので、写真に撮り、拡大して見ます。なぜ？ですって！歳をとると細かいものが読めなくなりますね。特にそれが動いていると増々読めないのです。こうして写真に撮り拡大して見ることにしているのです。さて番号は290番と読めました。もう足輪を付けてから3年以上たっているはずです。十分繁殖適期のはずですが、ペアの相手がいないのでしょう。ほかのもっと若い鳥と一緒に行動しているよう



今年初めて見たヒナ連れ



玄関から中をのぞいていました

でした。早く良い相手が見つかるの良いのですが……。この後はタンチョウの姿を見ないまましばらく走りました。そしてここはもう屈斜路湖畔です。林の中に2羽のタンチョウが。後ろには湖の湖面が見えています。2羽は良い感じにくっ付いていたので、ヒナがいるかと思いましたが見当たりませんでした。はて？、コースを変えて帰りながらの観察です。農家の庭にタンチョウが1羽見えました。はて？と思いながら引き返して見ると、なんとこの農家の玄関フードに顔をくっつけて中を見えています。もう1羽は30mほど離れた堆肥山で食事中的ようでした。農家の庭にはいろいろなものが置いてあるので、ヒナがいるかどうかは分かりませんでした。でも玄関フードの中に何があったのでしょうかね。

住吉先生の随筆は北獣ホームページにて、カラー写真付きで掲載しています。